

---

# 恋姫×スクライド

午後の緑茶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋姫×スクライド

### 【Nコード】

N5471W

### 【作者名】

午後の緑茶

### 【あらすじ】

恋姫とスクライドのクロスです。カズマのカッコ良さをうまく書ければいいなあと考えています。ちなみにカズマはかなみに出会っていない設定です

## プロローグ

？「ほらあゝ、二人とも早く早く〜！」

どこか暖かく緩い雰囲気の桃色の髪をした少女が後ろにいる黒く美しい髪をした少女と、赤い髪の小さな少女を急かす

？？「お待ち下さい、桃香様。お一人で先行されるのは危険です」

？？？「そうなのだ。こんなお日様一杯のお昼に、流星が二つも落ちてくるなんて、どう考えてもおかしいのだ」

二人はどんどん先に行く桃香という少女に危険だと注意する

？？「鈴々の言う通りです。もしやすると妖の類かもしれません。慎重に近付くべきです」

？「そうかなあ〜？・・・関雲長と張翼徳っていう、すっごい女の子たちがそういうなら、そうなのかもだけど・・・」

張飛「お姉ちゃん、鈴々たちを信じるのだ」

関羽「そうです。劉玄德ともあるうお方が、真っ昼間から妖の類に襲われたとあっては、名折れというだけではすみません」

劉備「うーん・・・じゃあさ、みんなと一緒に行けば怖くないでしょ？だから早くいこ」

そう言って劉備はまた先に行ってしまった

張飛「はあ~~~~~、分かってないのだあ~~~~」

関羽「全く。・・・鈴々。急ぐぞ」

張飛「了解なのだ」

三人は流星が落ちた方角に向かった

??「・・・ん？」

家の中のはずなのに乾いた風を肌に感じて眼が覚める  
いつもと違う寝床の感触に違和感を感じ、周りを見渡すと一面の荒  
野が広がっていた

??「なんだ？外で寝ちまったのか俺・・・」

しかし周りに知っている場所がなく、寝ぼけたにしては規格外すぎる  
すぐに自分の家の付近ではないことを理解した彼は服に付いた砂を  
払いながら立ち上がり、

赤みがかった茶色い髪を手で掻きながら身の回りを確認する

??「なんもねえし、なんも持ってたねえ……。これじゃあ誰とも  
連絡とれ「なんじゃこりゃあああああ!!」……。なんだあ?」

へんな叫びを聞きつけて向かってみると白くて背の高い拳動不審の  
男がいた

白い男「どこだここ??なんかのどつきりか!??」

あまり関わりたくなかったが人が彼しかいなかったため接触してみる

白い人「は!??まさか誘拐?でも俺「おい!お前!」……。へ?」

驚いた顔でこつちを見ている白い男に希望は薄いが聞く

??「あんたここがどこだか分かるか?」

白い男「……。わかりません」

やっぱりなとため息を吐いていると、おそらく同じ境遇の人だと感  
じた白い男が尋ねる

白い男「あの……。君も気が付いたらここにいたの?」

??「ああ」

お互いの状況を確認し、とりあえず一人ではないことに少しほっとする白い男

白い男「俺は北郷一乃。聖フランチェスカ学園の学生だ。君は？」

??「・・・カズマだ」

これが後の天の御遣いと、天の拳の出会いであつた

## 1話 『関雲長』

お互い同じ境遇だと分かった二人はまずこの辺りに詳しい人を探そうということになり、

荒野を歩いていたのだが・・・

カズマ「だあゝから、ついてくんじゃねえよ!!」

一刀「待てよ!!一人より絶対二人で行動した方がいいってば。っていうか一人にしないで!!」

実際はカズマが人を探すには手分けした方がいいと言ったが一人が不安な一刀は一緒に探そうと提案する。

しかしどどん一人で行ってしまうカズマに一刀がついていつてる状態だった

一刀「携帯も圏外だし、本当にどこの田舎だよ」

一刀は持っていた携帯電話を見るがアンテナ表示は無情にも1本だった

カズマ「お前向う探せよ!!」

一刀「いや。こういう時はあまり離れない方が・・・ん?」

その途中前方に目をやると服を黄色で統一した3人組が歩いて来た

カズマ「人だ。っておい!!」

一刀「人だ！やっぱり一緒に行動しててよかったな」

人を見つけたことに喜び、黄色い人達に近づいて行く一刀  
しかし一刀は近づいてやっとな気付いた

一刀「コスプレ？」

とりあえず東洋系の顔つきだが、格好は鎧というか何というか、外  
に着ていく格好ではない

アニキ「・・・はあ？何言ってるんだ、こいつ」

チビ「さあ？あつしに聞かれても・・・」

アニキ「おメエ、分かるか？」

デブ「・・・わがんね」

リーダーの様なノツポの奴と、子分の様なチビとデブが一刀を変な  
眼で見る

一刀「あの、すみません・・・」

アニキ「何だよ」

一刀「ここ、どこですか？」

格好が変でもとりあえず現在地を聞いてみる

3人「・・・はあ？」



3人は呆れたようにさらに変な眼で見る

一刀「僕達道に迷ってしまつて困っているんです。もしよかったら、連絡が携帯充電させてもらえませんか？バッテリー切れちゃって・・」

さすがに変な格好の人でも携帯くらい持つているだろうと思つていたが

チビ「アニキ。こいつ頭おかしいつすよ」

アニキ「俺も思つた」

デブ「んだ」

なんだか反応がおかしい、言葉のキャッチボールが出来てない

一刀「あの、言葉通じてますよね？」

アニキ「それはこっちが聞きてえぜ。俺の言つてること分かるか？」

一刀「はい、分かりますけど・・」

一刀は自分がちゃんと喋れていなかったのかと考えていたら冷たいものが頬に触れた

アニキ「なら、よかった・・。ついでに金出してもらおうか？」

頬に触れたそれはコスプレ用のおもちゃではなく包丁より鋭利な刃物

一刀「はい？」

アニキ「言葉通じてるんだよね？なら、早く金出せよ。ついでにその光る服もな」

カズマ「てめえら強盗か・・・」

チビ「へっ、今頃気づいたのかよ」

デブ「だな」

今まで事の成り行きを興味なさげに見ていたカズマが強盗と気付き近寄って来る

慌てて3人から離れてカズマの横に移動する一刀

一刀「や、やばいぞカズマ！あれ本物だ！！」

一刀は初めて向けられる凶器に焦る

カズマ「お前、闘えないならさがってるよ」

一刀「おい、カズマ！！」

一刀は危険だと言うがカズマは3人の前に立つ

アニキ「何だ。お前、これが怖くないのか？」

そう言って持っている刃物をカズマに向けて威嚇する

カズマ「はっ！んなもんでビビるわきゃねえだろうが。」

カズマは右手を開いた状態で前に出して鋭い眼光で3人を睨む

カズマ「こいつらぶっ飛ばして人のいる所まで案内させればいいだろうが！！」

カズマは開いた手を人差し指、中指、薬指、小指を順番に折り。最後に親指を折って出来た拳を軋むほど握りしめる

カズマ「さあ、案内してもらうぜ。人がい「まてえええええい！！！！」・・・ああん？」

殴りかかるうとした瞬間、遮るように勇ましい女の声が響いた

??「丸腰の一般人に刃を向けるとわ！！貴様らに武人の心はないのか！！！」

アニキ「なんだ、てめえは！！！」

突然現れた女に驚きながらも刃を向ける

??「賊ごときに武人の心を問いても無駄か……。なら仕方ない、弱気者を苦しめる獣よ。

この関雲長が成敗してくれる！！！」

何もない荒野の透き通るような空の下で

青龍円月刀を構える関雲長と名乗る少女と

彼女の登場に動揺する3人組と一刀

そして、握った拳を向ける相手を盗られて不満そうなかズマがそこにいた・・・

## 2話 『出会い』（前書き）

カズマの性格ちよつと変えます。でないと一人で行っちゃい  
そうなんです・・・

## 2話 『出会い』

黄色い3人組は関雲長と名乗る少女によって軽く倒され、尻尾を巻いて逃げていった

関羽「まったく……。怪我は無いか？」

一刀「えっと、うん。大丈夫だよ、助けてくれてありがとう」

カズマ「けッ」

危険が去ったことに安堵する一刀と、獲物を盗られたことに不満なカズマ

しかし一刀はまた戸惑っていた

一刀「（また、コスプレだ……。）」

少女は緑を基調にした服を着ており、これもさっきの3人組同様フアッション誌では見かけないものだった

関羽「いや、怪我がなくてなによりだ。しかし、こんな場所で武器も持たずに不用心だぞ」

服装はコスプレだが関羽の闘う姿や武器を見てとりあえずここは日本ではないのでは？

そう考えた一刀は少女に尋ねる

一刀「いきなりで申し訳ないんだけど、ここどこだか教えてもらっていいかな？」

関羽「なにも知らないで歩いていたのか？・・・ここは幽州啄郡。五台山の麓だ」

一刀「？」

カズマ「？」

場所を聞いた2人は聞きなれない地名に首をかしげるとりあえず自分達の知らない土地ということはわかった

??「待つてよく、愛紗ちゃん」

えらく緩い雰囲気の声が聞こえ、目を向けると桃色の少女と赤髪の少女がこちらに走ってきた

??「もう、いきなり走って行っちゃうんだもん」

??「愛紗はよくお姉ちゃんをおいていくのだ」

関羽「あ、えっと、すみません桃香様。この2人が賊に襲われていましたので・・・」

3人は知り合いのようで、どうやら関雲長が2人を置き去りにしてしまっただけらしい

しかし一刀はそんな会話をよそに今の状況について考えていた

一刀「（ゆうしゅうたくぐん？そんな所学校の近くにない。それにあの子自分のこと関雲長って言ってたな・・・）」

聞いたことのない地名、聞いたことのある名前に一刀は軽く混乱してきた

カズマ「それよりお前らだれだ？」

些か失礼だがここでカズマが3人に訪ねた

「さっきは助けてくれてありがとう」

関羽？「姓が北、名が郷、字が一刀か？」

一刀「字? いや、姓が北郷で名前が一刀だ。字は無いよ」

聞き慣れない字という単語が出てきたが自分にはない

関羽「字が無い？珍しいな。私は姓が関、名が羽、字が雲長だ」

はい？

劉備「私は姓が劉、名が備で字が玄德だよ」

はい？

張飛「鈴々は張飛なのだ」

「一万はいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！！！！！」

4人「わあああ?！」



あまりのビックネームに思わず叫ぶ一刀

カズマ「脅かすんじゃないよ!!」

一刀「ごっ、ごめん・・・」

3人の名前があ有名な三国志出てくるものであるから仕方ないきもするが・・・

一刀「（周りの風景やら関羽さんの暴れっぷりやゆうしゅうたくぐんなんかで怪しい所だとは思っていたけど・・・）」

4人が変な目で一刀を見る

一刀「あもう、質問していいかな？」

一刀「やっぱり・・・」

一刀は3人に今の世の中について確認した

一刀「（信じがたいがここは三国志の時代だ。しかも年数的に黄巾の乱より前。いや、もうその時期か？）」

カズマ「おい。自分だけ解ってないで俺にも教えろ」

一刀「あ、ああ。つまりな・・・」

一刀説明中・・・

カズマ「なるほど、タイムスリッパか・・・。なにiiiiiiiiiiii  
！！！！！」

一刀「タイムスリップな」

カズマに説明しているときに気づいたがどうやらカズマは三国志を知らないらしい

カズマ「おい。どういうことだよ！！」

一刀「俺にだつてわかんないよ・・・」

ちよつと歩けば自分の知っている場所につくだろうと思っていたカズマは混乱した

一刀「とりあえずこの事を何も知らない俺たちが変に動いたらややこしくなるだろうからあの子達について行かないか？」

カズマ「ぐぬぬ・・・」

自分の知っている場所がどこにもない事に気づいたカズマは一刀の案に乗ることにした

劉備「あのね、次は私が質問していい？」

一刀「え！？あ、うん。どうぞ」

劉備「お兄さん達は どうしてこんなところにいたの？」

カズマ「気がついたらここだった」

一刀「同じく」

劉備「うーん。じゃあどの出身？」

一刀「東京の浅草」

カズマ「ロストグラウンド」

2人「うん？」

ここで初めて2人はお互いの出身に違和感を持つ

一刀「外国？」

カズマ「浅草ってどこだよ？」

一刀はもしかと思いカズマに尋ねる

一刀「カズマの住んでた所って日本？」

カズマ「ん？そっいえば昔そう呼ばれてたっぽいが今は違っぞ」

一刀「（昔？じゃあ俺と同じ時代の人じゃない？）」

カズマ「どうしたんだよ？」

一刀「多分カズマは俺の時代より未来の人間だと思うよ」

カズマ「なんでだよ？」

一刀「いや、俺が住んでた日本にロストグラウンドなんて所は無かったし、カズマ昔は日本って呼ばれてたって言ってたろ？」

俺はカズマとの会話に出た矛盾をのべた

カズマ「ふうん・・・」

一刀「あれ、あんまり驚かないな」

もつと驚くと思っていたけど意外だ・・・

カズマ「まあ、タイムなんとかしたらもう驚くもんねえだろ」

確かに

張飛「んにゃ、どっちも聞いたことないのだ」

関羽「私もないな、どこの州だ？」

劉備「ねえねえお兄さん達。もしかしてこの国のことなんにも知らないの？」

劉備が何かを期待した瞳で見てきた

カズマ「知らん」

一刀「知らない・・・。いや、知識としては知っているけどその知識が俺の居る時代の遙か昔なんだ」

劉備「・・・？」

一刀「つまり俺達は今よりずっと先の未来から来たってこと」

もう頭がパンクしそうで俯いていると・・・

劉備「やっぱり思った通りだよ、愛紗ちゃん！鈴々ちゃん！」

劉備が目をキラキラさせながら身を乗り出してきた

劉備「この国のこと全然知らないし、たまに変な言葉使うし、それにそれになんと言っても服が変！」

カズマ「なんだと！」

一刀「この時代だと変なんだよカズマ……」

言われるとちよつとへこむ……

劉備「この人達がきつと天の御使いさんと天の拳を持つ人だよ！」

関羽「管路の予言ですか……。あれはエセ占い師の戯言では？」

張飛「鈴々もそう思うのだ」

劉備「でも、東方より飛来する流星は、乱世を治める使者の乗り物だーって言ってたよ？」

関羽「確かに占い通りだとこのお方達が御使い様ということになりますか……」

鈴々「でもお兄ちゃん達なんか頼りなさそうなのだ」

関羽「英雄の覇気は感じられませんな」

劉備「そんなことないと思うけどなあ」

3人にジロジロ見られて一刀達は居心地が悪そうだ

一刀「で、その天の御使いってなんだ？」

一刀は今まで疑問に思っていたことを口にした

関羽「この乱世に平和を誘う使者。・・・自称大陸一の占い師の言葉です」

カズマ「乱世？」

張飛「今の世の中のことなのだ。漢王朝が腐敗して弱い人達から沢山税金をとって、好き勝手にしてるのだ！それに盗賊もいっぱいいて弱い人を苛めているのだ！」

劉備「そんな力の無い人達を守ろうって立ち上がったのが、私達3人なんだけど・・・。3人だけじゃなんにもできなくて・・・」

関羽「どうすればよいか方策を考えていたところでさっきの予言を聞いて・・・」

張飛「鈴々達はここに來たのだ」

一刀「それで御使いが居るであろう場所に俺達がいたと・・・」

丸つきりアニメや小説何かによくある設定である

一刀「だけど俺達はそんなすごい人じゃないよ？」

劉備「それでもあなたがこの国の人じゃないっていうのは事実だよ！」

一刀「うーーん・・・」

自分達が天の御使いじゃないかという問題に悩んでいると・・・

ぐう~~~~~。

と、盛大に腹の虫が聞こえた

カズマから・・・

カズマ「もう無理・・・」

一刀「カズマ？」

カズマ「限界だ！腹減った・・・」

そういつて頂垂れるカズマ

一刀「そういえば俺も腹減ったな・・・」

張飛「鈴々もお腹減ったのだー！」

劉備「私達も朝ご飯食べてなかったね」

関羽「近くの街に移動しますか」



カズマ&張飛「賛成・なのだー」

こうして5人は街に移動した

### 3話 『誓い』（前書き）

カズマの性格がうまくつかめてない気がします・・・

### 3話 『誓い』

カズマ side

しっかしなんだかめんどくせえことになってきたな・・・

成り行きでこいつらについてきたけど早く元いた時代に帰りたいぜ

俺達は飯を食うため近くの街に来たが、本当にタイムなんとかしち  
まったんだな。

街並みや歩いてる奴の服装が俺の知らねえもんばかりだ

張飛「お兄ちゃん達何やってるのだ？ 鈴々は腹ペコなんだから早く  
くるのだ！」

俺と・・・なんつたつけ？ もう一人の白い奴が街並みに気を取られ  
てたらさっき会った3人組のチビ助が遅いと文句言ってきたやつだ

張飛「お店はこっちなのだ！」

一刀「わっと！！！！」

カズマ「お、おい！ 引つ張んな！！」

待ちきれないチビ助は俺達の腕を掴んで店に引きずって行った

そのまま俺達は店に入って食いものの匂いを嗅いだ瞬間俺とチビ助  
の涎は止まらなかった

めんどくせえ事は今は無しだ！ まずは飯だ飯！！

side out

一刀&カズマ「ふう〜〜〜〜〜」

なんて出された料理を平らげ、満腹吐息をついていた俺達に

劉備「それでね、北郷様。カズマ様」

劉備が姿勢を正して話しかけてきた

劉備「さっきも言った通り、私達は弱い人が傷ついて倒れていくのが我慢できなくて、少しでも力になればと思って旅を続けていたの」

真剣な雰囲気になり、俺もカズマも話を聞く

劉備「でも・・・3人だけじゃもう、何もできない・・・そんな時代になってきてる」

関羽「官匪の横行、太守の暴政・・・弱い人間が苦しみ、力を持った者がそれを虐げる。今はそんな大陸になっている」

張飛「3人じゃ、もうなんにも出来ないのだ・・・」

劉備「でも、そんなことで挫けたくない。私達でもなにかできるはず。・・・だから御使い様！！」

一刀「は、はい！？」

劉備「私達に力を貸して下さい！！」

劉備はずいっと身を乗り出して頼み込んだ

劉備「天の御使いであるあなたが力を貸してくだされば、もっともっともっと弱い人達を守れるって、そう思うんです」

劉備は真っ直ぐな瞳を興奮で少し潤ませながら、俺達の手を強く握り締める

そこから伝わるのはただ弱い人を守りたい・・・そんな優しいくて暖かい気持ち俺の手にも伝わって来た気がする

一刀「だけど俺は天の御使いなんてすごい人じゃないよ？どこにもいる学生だ・・・そんな俺が人を助けるなんて出来るのかな？」

人を助けるのは口で言うほど簡単なものじゃないと思う

関羽「あなたの言うことは正しいですが、正直あなたが御使いでなくても良いのです」

カズマ「ということだ？」

一刀「御使いでなくてもいい？・・・なるほど、御使いかもしれな  
いって風評か」

張飛「そうなのだ。鈴々たちは強いけど名声とか実績がないのだ」

関羽「私達は山賊退治などしていますがそれは一部の地域でしか評判がありません。」

劉備「誰かを救っても、違う場所で誰かが泣いている・・・もう私達だけじゃ限界が来てるんです」

確かに御使いという神輿があれば劉備達には大きな力になるだろう  
天の御使いが傍にいれば劉備達の行動に世間は注目するようになる  
多分俺がここに来た理由はこれなのかもな・・・彼女達に力を貸す  
ために。

一刀「爺ちゃんが、『世に生を得るは事を成すにあり』って言うて  
たっけ・・・」

なら今日の前にいる劉備達こそ、その切っ掛けなのかもな

俺は深呼吸をしてーーーーー

一刀「・・・分かった。俺でよければその神輿役、引き受けるよ」

劉備「本当ですか!!」

カズマ「お前本気か？」

一刀「カズマはどうする？今のところ帰る手段もないしもしかしたら世の中平和になったら帰れるかもしれないよ」

カズマ「・・・」

劉備「カズマ様・・・」

カズマ「俺は世の中が平和にとか、あんましピンとこねえが・・・  
弱い奴らが強い奴のまえて泣く悔しさは分かる」

カズマは強く握った拳を見つめながら呟く

カズマ「だからお前らの気持ちも分かんなくはねえよ・・・」

関羽「では!!」

カズマ「帰る手段が見つかるまでは協力してやる」

一刀「それにご飯食べさせてくれた一飯之恩もあるしね」

カズマ「まあな・・・」

そう言つて笑顔で劉備達を見ると・・・

劉備「一飯之恩？」

関羽「一飯之恩・・・ですか」

張飛「一飯之恩・・・」

一刀「ん？どうしたの皆」

3人は気まずそうな顔をして

劉備「えっと、天に住んでた人達だからお金持ちかなあ、なんて思  
っています」

関羽「ご相伴にあずかるうかと・・・」

カズマ「おい、まさか・・・」

張飛「つまりお金持っていないのだ」

一刀「・・・え？」

この時、一瞬頭が真っ白になったのと店の女将が厨房から出て来た  
のは同時だったと思う・・・



劉備「はあ~~~~~、疲れたよあ~~~~~」

カズマ「なんで俺があんな事・・・」

俺達はある後、無銭飲食を許してもらったかわりに店で皿洗いなどの手伝いをした。

正直疲れたが、話を聞いていたらしい店の女将が祝いの酒と、近辺を納めている公孫賛が義勇兵を集めているという情報をくれた

ちなみに公孫賛は劉備の学友らしい。そういうのは早く気付いて欲しいものだ

劉備「この辺りかなあ」

関羽「女将の話だとこの辺りです」

張飛「きつと丘の向こうにあるんじゃないかなー？」

一刀「じゃあ、行ってみよう」

5人「おお~~~~~!!」

眼下に広がるのは一面桃色の世界

劉備「これが桃園かあゝゝ、すごいねゝゝ」

関羽「美しい・・・、まさに桃園に相応しい美しさです」

一刀「雅だなあゝゝゝ」

などと、3人でしばし風雅を楽しんでいると

張飛「さあ酒なのだゝ!!」

カズマ「おい。早く飲むぞ!!」

張飛が一刀の周りを走り回り、カズマが酒瓶を開けようとする

関羽「まったく、もう少しこの景色を楽しめばよいものを・・・」

劉備「あはは、じゃあ飲もつか」

一刀「よし、準備しよう」

手に持った盃に酒を注ぎながら、

一刀「それにしてもあの有名なシーンに同席できるとなんて・・・」

劉備「どうかしたの?ご主人様」

劉備達はこれから俺に仕えるかたちになるらしい

カズマでもいいじゃないかと言ったが、柄じゃないと断られた  
だから一応俺がみんなのリーダーになった

これはおそらく俺が天の御使いでカズマが天の拳であろうという予

想でもある

天の拳についてはわかってないが俺は普通の一般人と自負しているためカズマが天の拳だろう

一刀「いや、なんでもないよ・・・ただこれからどうすればいいのかなあって」

関羽「前を向いて一歩一歩、歩くしかないでしょうね」

張飛「立ち止まっても、物事は何も進展しやしないのだ」

一刀「・・・張飛の言う通りかもな」

張飛「そうそうなのだ！・・・それよりお兄ちゃん、カズマお兄ちゃん」

一刀「ん？」

張飛「お兄ちゃん達は鈴々達のご主人様になったんだから、ちゃんと真名で呼んで欲しいのだ」

カズマ「なんだそれ？」

関羽「我らの持つ、家族や親しい人にしか呼ぶことを許さない神聖な名です」

劉備「例え知っていてもその人に呼ぶことを許さないと口に出しちゃいけないんだよ」

張飛「だけどお兄ちゃん達には呼んで欲しいのだ」

一刀「（真名か・・・）」

それだけ期待してくれているんだろうな

関羽「我が名は愛紗」

張飛「鈴々は鈴々なのだ！」

劉備「私は桃香！」

一刀「愛紗、鈴々、桃香」

3人の真名を呟いていると、

カズマ「で、お前は？」

一刀「へ？最初に名乗ったよね？」

カズマ「・・・忘れた」

劉備「あははは・・・」

絶対聞き流してたな・・・

カズマ「俺はカズマだ。それ以外無えよ」

一刀「俺は北郷一刀だ。一刀でいいよ」

カズマ「一刀か、オツケー刻んだ。」

そして彼女達を真っ直ぐ見つめ

一刀「今はまだ自分に何が出来るか分からないけど、みんなの力になれればと思うよ」

劉備「じゃあ結盟だね！」

そんな俺達を見ていた愛紗が持っていた盃を空に向かって高々と掲げた

関羽「我ら5人！」

劉備「姓は違えども、姉妹の契りを結びしからは！」

張飛「心を同じくして助け合い、みんなで力無き人々を救うのだ！」

関羽「同年、同月、同日に生まれることを得ずとも」

桃香「願わくば同年、同月、同日に死せんことを！」

一刀「・・・乾杯！」

この桃園の誓いから俺は『事』を成すため、戦国の世に踏み出した。  
・

#### 4話 『公孫賛』（前書き）

基本一刀視点です

#### 4話 『公孫賛』

桃園の誓いの後、公孫賛の本拠地に向かい街で情報収集を行なった。桃香の友人でも相手は街の太守、ズカズカ行っても門前払いだと思つた俺たちは近くに居る賊のを討伐するという公孫賛に自分達でも義勇兵を集めてそれを提供することにした

と、言つても。兵隊を雇う金なんて俺達は全然持つてなかった・・・なので正式に雇うのではなく、半日だけ兵隊の『フリ』をしてもらうことにした。

無い金は天の筆と称して俺が持っていたボールペンを愛紗に売ってもらつたらかなり金額になつたそうだ

そして数時間後には百人ほどの兵士（偽）が集まっていた

これなら公孫賛も目をつけてくれるだろうと、俺達は公孫賛の居る城へ向かった

一刀「ここまででは順調だな・・・」

百人ほどの兵士を連れて城に行つた俺達は門前で少し待たされたが、下にも置かない扱いで玉座の間へと案内された

公孫賛「桃香！久しぶりだなー！」

劉備「白蓮ちゃん、きゃー！久しぶりだね！」

二人は再開を喜びながら話している

カズマ「で、まずどうするんだ？」

一刀「公孫賛には悪いけど俺達の評判を良くするために利用させてもらうよ。まずは愛紗と鈴々だけでも兵ではなく将として扱ってもらえるようにする」

俺とカズマが公孫賛に聞こえないように話していると、

公孫賛「桃香が言っているのはこの4人のことか？」

劉備「そうだよ。んとね、関雲長、張翼徳、それに官？お墨付きの天の御使い、北郷一刀さんと天の拳を持つカズマさん！」

公孫賛「官？？あの占い師か・・・、この辺じゃかなりの噂だ。眉唾ものだと思ってたけど」

劉備「そんなことないよ！2人共本物だよ！」

公孫賛「ふーん・・・」

頭からつま先までジロジロと見つめてくる公孫賛

カズマ「あんまジロジロ見んじゃねえよ・・・」

劉備「あー、白蓮ちゃん信じてないでしょ？」



公孫賛「いや、桃香は嘘つかないし信じてるけど・・・」

公孫賛は顎に手を添えて

公孫賛「なんかそれっぽくないなあと思って」

・・・ですよね

いきなりこの人達が天からきましたと言っても普通は信じない

劉備「私には二人の背後に後光が見えるよ！」

一刀「・・・ま、後光は別として、一応桃香達と行動を共にしているよ。宜しく」

公孫賛「そうか。桃香が真名を許したのだから一角の人物なのだろう。・・・ならば私のことも白蓮で良い。友の友なら、私にとっても友だからな」

屈託のない笑顔を見せる公孫賛、・・・いい人だなあ。

一刀「北郷一刀だ。宜しく」

カズマ「カズマだ」

公孫賛「宜しく頼む」

挨拶を終えて話の本題に入る

どうやら白蓮には兵の偽装がバレていたようだ。さすがは一太守だなと感じて本当のこと告げると驚いていた

流石に全員が偽兵士だとは思わなかったようだ・・・

公孫賛「一人も居ないのか・・・？」

一刀「桃香と行動を共にしているのは俺とカズマ、関羽に張飛だけだよ」

公孫賛「関羽と張飛は後ろの二人のことか？」

関羽「我が名は関羽。字は雲長。桃香様の第一の矛にして幽州の青龍刀。以後、お見知りおきを」

張飛「鈴々は張飛なのだ！すつごく強いのだ！」

劉備「二人共すつごく強いんだよ！」

胸を張って二人のことを自慢する桃香

公孫賛「まあ、桃香の胸ぐらいの保証があるなら、それはそれで安心なんだけど・・・」

うーん、と唸りながら愛紗達を見つめていた公孫賛の後ろから、

??「その二人の力量を見抜けないのであれば、太守として些か不安ですぞ。伯珪殿？」

痺れ毒を含んだような言葉と共に、一人の美少女が現れた

公孫賛「むう・・・ならば趙雲はこの二人の力量がわかるのか？」

趙雲「当然。武を志す者として、その姿を見ればどれほどの人物が分かるいつもの」

公孫賛「へえ．．．まあ星が言うならそうなのかな」

趙雲「ええ．．．そうだろう？ 関羽殿」

関羽「そう言う貴女も腕が立つようだが？」

張飛「鈴々もそう見たのだ！」

趙雲「さて．．．どうなのでしょうな？」

余裕を感じさせる笑みを浮かべる趙雲

趙雲「（それと、もう一人．．．）」

チラリ、と話を聞いていないであろう、そっぽを向いているカズマに視線を向ける

趙雲「（武、とは言わないが．．．何か力を持っているような不思議な御仁だ．．．）」

side カズマ

何かこの時代はめんどくせえ事ばっかだな・・・

賊やら、太守やら、世の中平和にとか、俺の居た所はもっと自由だった気がするぜ

いや、そうでもねえか・・・

ホーリーやら、ネイティブアルターやら、街のゴロツキとかいたな  
今は関係ねえか

それにしても我ながら変な奴らに協力しちまったな

あの頃は自分の周りだけよければいいと思っていたが・・・

世の中全部か、でけえ事考えてんな。嫌いじゃねえ

俺としては占い師を探してえんだが場所が分からねえ・・・

そいつに聞けば帰る方法も分かるかもしれないが、ここに来ちまった理由も気になる

天の拳か・・・そういえば、誰かに期待されるなんてあんまし無かったな・・・

あいつ等三人は、俺と一刀に期待してる。

勝手に評価されんのは好きじゃねえが、不思議と悪い気はしねえな・  
・

まあ、帰る方法が見つかるまでは協力してやるよ

さて、小難しい話も終わったようだし、早く賊退治に行こうぜ

さっさと終わらして飯食って寝てえんだよ、俺は・・・

## 5話 『拳』（前書き）

ご指摘を頂いたので追加補足いたします。前に表記したかなみと出会っていない設定ですが、これは時間軸はアニメ開始時のままで君島には出会っていますかなみとは出会っていない・・・つまりもとからかなみ存在しない設定に勝手ながらさせて頂きました。作者のご都合主義で申し訳ありません

## 5話 『拳』

こうして俺達は公孫贄陣営に加えてもらつことになった

城門に呼ばれた俺達の目の前には武装した兵士達が整列している  
千人単位の間が集まる様子は壮観の一言だった

趙雲と愛紗達は自分達の志を語り合つて意気投合したらしく、真名  
を交換していた

そんな風に会話を楽しんでいると陣割が決まった

関羽「我らは左翼の部隊を率いることになりました。新参者に左翼  
全部隊を任せるとは、なかなか豪毅ですな、白蓮殿も」

劉備「それだけ期待されているのかな？」

一刀「そうだろうね。・・・鈴々、頼むよ？」

張飛「任せろなのだ！」

ドン、と胸を叩いて自信満々な鈴々の頭を撫でていると軍の先頭に  
いた公孫贄が演説を終え、大地を揺るがす兵士の声を満足気に聞い  
ていた公孫贄はいよいよ出陣の号令を出した

一刀「賊相手に初陣かあゝ・・・」

関羽「どうかされましたか？」

一刀「いや、俺のいたところは平和で戦争なんて遠い別の国でしか起こってなかったから正直怖くて・・・」

自分の振るえる手を見せながら、不安を吐露する

一刀「男の俺がこんなに怖がつてちゃ、世話ないな・・・」

関羽「そんなことはありません！戦いを怖がるのは、人として当然です」

劉備「そうだよ。戦いは人を傷つけること・・・本当はやっちゃいけないんだよ」

張飛「でも、鈴々達が怖がつてたら弱い人達を守れないのだ」

関羽「だから勇気を振り絞り、暴虐と対峙するのです」

一刀「・・・強いな、三人とも」

三人は出会う前から山賊なんかと戦っていたんだから当然か・・・

あれ？

一刀「カズマは戦いが怖くないのか？」

ここで出陣の時から平然としているカズマに尋ねる

カズマ「んあ？別に。・・・こんな多人数は初めてだが、俺ももっていた場所じゃ戦ってたからな」



「刀」でも、人を傷つけるかもしれないんだぞ？」

カズマ「分かってるよ、んなこと。・・・けどな、俺の目の前に分厚い壁があつて、それを突破しなければならぬなら、俺は迷わずこの力を使う」

「刀」「力？」

そう言つてカズマは右手の拳を握る

「刀」「カズマ、それって・・・」

カズマ「お前もいつまでもビビってんじゃねえぞ。戦つて決めたんだろ？」

カズマは強い視線を俺に向けた

カズマ「一度こうと決めたら、自分が選んだんなら決して迷うな。迷えばそれが他者に伝染する。選んだら進め、進み続ける。」

「刀」「カズマ・・・」

選んだら進めか・・・

そうだな、俺は桃香達と進むって決めたんだ

パシッ、と頬を叩いて弱気になっていた自分に気合を入れる

「刀」「よし！みんな頼りにしてるよ！」

三人「「「おー！」「」」

俺が決意を新たにしていると、

兵士「全軍停止！これより我々ほ鶴翼の陣を敷く！」

本陣からの伝令が命令を告げて去って行った

関羽「いよいよですね・・」

一刀「ああ。兵隊の指揮は愛紗、鈴々、任せたよ」

張飛「合点なのだ！」

関羽「桃香様はご主人様とカズマ殿と共に」

劉備「うん。二人とも気を付けてね」

関羽「御意。では！」

ペコ、とお辞儀した愛紗が部隊に号令をかける

兵士が抜刀すると同時に賊が突出して来た

張飛「それじゃあ、鈴々に続くのだ！」

関羽「全軍、突撃――――！！！！！」

号令と共に突撃していく愛紗達、兵数は相手の方が勝っていたが愛紗と鈴々に次々と打ち倒されていく賊

戦は完全にこちらが優勢だった

カズマ「なんで俺は待機なんだよ・・・」

劉備「まあまあ、ここは愛紗ちゃんと鈴々ちゃんに任せよう?」

一刀「ああ、それにこっちが優勢みたいだし無理に出ることないよ」

カズマ「けっ」

戦えなくてカズマは不満そうだ

しかし、カズマってそんなに強いのか?

元いた時代じゃ戦ってたらしいけど武器も持っていないし・・・

愛紗「よし、敵は総崩れだ!今こそ我らの力を見せるとき!」

張飛「みんな鈴々に続くのだ!」

こちらの勢いに飲まれて撤退していく賊

劉備「あ!敵が逃げていくよ」

一刀「ああ、これで・・・」

これで終わる。そう思っていたら・・・

兵士「で、伝令!!!」

慌てた様子で兵士が走って来た

兵士「左舷中央から敵！伏兵その数五百！！」

一刀「え？」

伏兵？・・・まずい、愛紗と鈴々は賊の追撃で離れている

ここにも兵士は残っているけど将がない

劉備「ど、どうしよう！ご主人様！」

一刀「くっ、せめて愛紗達に合流できれば・・・」

対抗できる兵数はあるが兵を率いたことのない俺と桃香は焦る

くそ！どうすれば・・・

カズマ「へっ、やっと出番か？」

一刀「なっ！？カズマ」

カズマは肩を回しながら迫る賊の方へ歩いて行く

一刀「待てカズマ！一人じゃ危ない！」

カズマ「こんなところで大人しくしてるなんて、御免だね」

振り返るカズマの顔に不安は無い、むしろ強い意思を感じる

「刀」でも一人でどうするんだ！？武器も持たないで・・・」

カズマ「武器ならある」

カズマは右拳を軽く掲げると、

カズマ「お前等はそこで待ってる！見してやるよ・・・俺の自慢の拳をな」

賊「はっはっはっは！行けーーーー！」

賊「あいつ等全員ぶっ殺せ！ー！」

部隊長「やつらも賊が伏兵を使うなんて思っまい。・・・ん？」

自分達の策に酔っている賊達の目の前に一人の変な服を着た男が歩いて来た

部隊長「なんだあ？お前」

カズマ「あんたが部隊の頭か？」

そいつは自分達を前に怯えることもなく不敵な笑みを浮かべながら立っていた

不振に思い、部隊を停止させた

部隊長「何かようか？小僧」

剣を向けて威嚇すると後ろにいた奴らもニヤニヤ笑いながら近寄って来た

カズマ「お前らをぶっ飛ばしに来た」

何言っただこいつ？

一瞬間が空いて言葉の意味を理解した時には笑いが出た

部隊長「だはははは！！一人で何が出来んだよ」

他の連中も笑う

カズマ「てめえ等なんか一人で十分だ」



辛うじて立った賊は鼻血を乱暴に手で吹きながら

部隊長「ぶっ殺す!!!」

カズマ「おお、怖え怖え。．．．だけど先に喧嘩売ってきたのはそ  
っちだぜ？」

賊「喧嘩？何言ってるんだ。こいつは殺し合いだ!!!」

カズマ「俺にとっては喧嘩だ。お前等が売った！俺等が買った！．．  
．それだけだ」

一刀「カズマ下がれ！殺されるぞ！」

後ろからカズマを追いかけてきた一刀が叫ぶ

カズマ「見てろって言ったろ？それに天の拳だなんだ言われてなん  
にもしねえのはおかしいだろ」

カズマは体制を低くしし、左腕をダラリと下げ、右腕を賊の方に向  
けた

カズマ「見してやるよ。俺の自慢の拳をな．．．」

右手の人差し指、中指、薬指、小指、最後に親指を閉じて軋むほど  
拳を握り締めた

するとカズマの体が光に覆われ、地面に数箇所穴が空いた

部隊長「なんだこりゃあああ!？」



地面は粒子となってカズマの右腕に集まっていく

髪の毛は逆立ち

背中には三つの赤い羽のようなものが生えて

腕は太陽を思わせる黄金の装甲に包まれ

拳は炎を感じさせる手甲に覆われていた

一刀「カズマ・・・？」

劉備「わぁ・・・」

これがカズマの言っていた力？

一刀はカズマに戦の前に感じた頼もしさの招待を知った

賊「なんだ？あれ・・・」

部隊長「い、いきなり地面が・・・」

地面がえぐれたり、カズマの腕に突然武装が出来たことに驚く賊

カズマ「おい！一刀！」

一刀「え！？な、何？」

カズマ「俺達の評判を高めるにはド派手にやった方がいいんだよな

？」

一刀は感じた、カズマなら一人でも賊達を倒せると、

一刀「ああ、派手にやってくれ！」

カズマ「へっ、あいよ！！！！！」

ドン！！！！！！

カズマは右手で地面を殴り、人が殴ったとは到底思えない音を出し、その衝撃で賊達の頭上へと飛んだ

一刀「な！！！」

劉備「ええ~~~~~~~~！！？」

一刀と桃香はその高さに驚き、賊は口を開けて呆然としていた

カズマ「悪いが、手加減はしねえ。最初から本気だ！！！」

カズマの右腕の装甲が開き、力いっぱい拳を握る

背中の羽の一つが砕けて、そこから光が吹き出し、カズマは賊に向かって勢い良く降下していった

ここから世の中は大きく動く

その始まりの地に

カズマ「衝撃のお・・・」

流星が落ちた

カズマ「ファーストブリットオオオ!!」

## 5話 『拳』（後書き）

やっとカズマの戦闘シーンが書けました。でも皆さんこんなで良かったんでしょうか？感想快くお待ちしています

## 6話 『道』（前書き）

鈴々って動かしやすいですねー

## 6話 『道』

一瞬だった・・・

カズマが放った拳は勢い良く賊達に突き刺さり、爆発音と共に巨大な土煙を上げた

土煙が晴れるとそこには衝撃で倒れている者、腰を抜かしている者、または目の前の出来事について行けずに呆然と立ち尽くしている奴もいた

かく言う俺と桃香もその一員で、口をポカーンと開けて地面から拳を離すカズマの後ろ姿を見ていた

仕方ないさ、誰がこの状況を見て口を開けずにいられるか

だって、そこには直径10mほどのクレーターが出来ていた・・・

一刀「・・・・・・・・」

劉備「・・・・・・・・」

確かにド派手にやって下さいと言いましたが、これは予想外ですカズマさん・・・

残った賊をクレーターの中から睨んだカズマは、

カズマ「さあ、挨拶は終わりだ。掛かってこい！！！」

そう言って右の拳を握りながらまた戦闘体制に入る





こうして

カズマと、愛紗や鈴々、そして星の活躍もあって公孫贗軍は完全勝利を得た

白蓮や星と合流し、意気揚々と引き上げる中、カズマはずっと不満そうな顔をしていた

やっと力が振るえると思ったら、敵は脱兎の如く逃げた

つまり不完全燃焼だ・・・

あの後、鈴々は勝って上機嫌だったが愛紗は申し訳なさそうな顔だった

カズマが撃退してくれたとはいえ、自分の仕える主君に敵の接近を許したのだから無理もないか

でも、無事だったし愛紗は悪くないよ、と言ったがまだ納得していないようだ

後で桃香にフォローしといて貰おう

大勝利で初陣を飾った俺達は、城の一角に部屋を与えられ、白蓮の下に留まっていた

こうしている間にも賊討伐は続き、今では愛紗と鈴々の武名を知らない者は居なくなった

一方カズマはというと、あまり前線には出なくなった

最初は自ら前線に出ていたが、『力』を使う度に賊が逃げるので実際作戦効率は悪くなった

なのでカズマは俺と桃香の護衛が主な役割になっていた

そんな俺は最近大陸の様子がどこかおかしいことに気がついた

賊の横暴、大飢饉、疫病、人の心には不安の文字しか浮かばなかった

そしてついに民衆の不満が爆発し、民間宗教の指導者に率いられた官庁を襲う事件が起きた

暴動は官軍によって鎮圧されるかと思っただが、反撃を受けた官軍が全滅

それをきっかけに暴徒達は周辺の街に侵攻し始めた

それは破竹の勢いで、今では大陸の三分の一が暴徒に乗っ取られ、世は動乱の時を迎えた

これに漢王朝は焦り、官軍は頼りにならないと判断し

地方軍閥に討伐を命じたのは、昨日の話だ

漢王朝の命が来た時、ここから本当の戦いが始まる

そう思った・・・

一刀「ごめん、遅くなった」

侍女に連れられてやって来た玉座の間には、白蓮の他に星や、桃香と愛紗がいた

一刀「あれ、鈴々とカズマは？」

関羽「鈴々は今カズマ殿を呼びに行っています」

しばらくすると元気な声で走ってくる鈴々と、

張飛「お～～い、お姉ちゃ～～ん！！！！」

カズマ「のわああああ！！！！」

鈴々に腕を掴まれ、引き摺られながら叫ぶカズマがやって来た

張飛「ほい！！！」

カズマ「ぐへ！！！！！！！」

鈴々は俺達の目の前にカズマを放り投げると、カズマは潰れたカエルのような声を出して床を滑った

張飛「カズマお兄ちゃん連れてきたのだ！」

劉備「え、えつと、ご苦労さま」

桃香は予想してなかった連れて来る方法に苦笑いで褒めていた

カズマ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一刀「カ、カズマ・・・？」

カズマ「だあああああああ！！！！！」

カズマは勢い良く飛び起きた、無事のような

カズマ「何しやがんだ！チビ助！」

張飛「にや？カズマお兄ちゃん呼びに行った時眠たそうだったから鈴々が連れてきてあげたのだ！！！」

につ、と無邪気な笑顔で答える鈴々

カズマ「あのな！俺だって呼ばれれば自分で行くわ！！！」

関羽「まあ、まあ」

カズマを宥める愛紗、そこへ白蓮がオズオズと話しかけて来た

公孫賛「え、えっと、休んでるところすまん。呼び出したりして」

一刀「構わないよ。それより、何かあったの？」

公孫賛「・・・北郷も朝廷より、使者が来たのは知っているな？」

一刀「ああ、黄巾党を討伐しろって言うやつだろ？」

そう答えると、白蓮は真剣な顔に戻り、話を始めた

公孫賛「そうだ。私は既に参戦することに決めたんだが・・・」

劉備「白蓮ちゃんが、これは私達にとって好機じゃないかって」

一刀「好機？何の？」

関羽「我等が独立する好機ということですよ」

公孫賛「黄巾党鎮圧で手柄を立てれば、朝廷より恩賞を得るだろう。桃香達がその気になれば、それなりの地位にもつけると思う。そうすれば、もっと多くの人達を守れるだろう？」

白蓮は少し困ったような顔で、

公孫賛「残念ながら、今の私にそんな力はない。この動乱を収めた

いと思つてはいるが・・・、すぐにはむりだ。そんな私に桃香達を付き合わせるのも悪い。時は金より貴重だからな」

一刀「ふむ・・・」

白蓮の言葉には一部の真理があるのだろう。だがそれだけとは思えなかった

白蓮はおそらく俺達の扱いに困っているのだろう

客将としてはすでに星がいる。それに最近名が上がってきた桃香達がいたら、それは太守として面白くないだろう

一つのグループにリーダーより名声のある人物はいらない。だから、手柄を立てさせてさつさと独立させるのが無難だ

まあ、人の良い白蓮のことだから、そこまで意地悪く考えていないだろうけど・・・

なら、今までの休む場所とチャンスくれた白蓮には感謝の念が絶えない

一刀「・・・そうだな。俺達もそろそろ自分達で頑張ってみるか」

張飛「でも、鈴々達だけで大丈夫かな？」

一刀「それでも、いつまでも白蓮に頼りっぱなしじゃまずいだろう？」

関羽「そうですね。しかし、私達には手勢というものがない・・・それが不安ですね」

俺達がこれからについて考えが浮かばず、悩んでいると・・・

趙雲「手勢なら街で集めれば良い。な、伯珪殿？」

案を出したのは星だった

公孫賛「お、おいおい！私だって討伐隊を編成するために兵を集めるんだからそんなの許せるはず・・・」

超雲「伯珪殿、今こそ器量の見せ所ですぞ」

公孫賛「うつ・・・」

顔が引きつっている白蓮に星が悪戯っぽい笑みを浮かべて、

趙雲「それに伯珪殿の軍は皆勇猛ではありませんか。義勇兵の五百や千、友の門出に贈ってやればよいのです」

公孫賛「む、無茶言っなよ・・・」

趙雲「私も勇を奮って働きましょう。・・・どうです、伯珪殿？」

公孫賛「むう」。あ、あまり多く集めないでくれると助かる・・・」

渋々といった感じで了承した白蓮に思わず苦笑が漏れそうになる

カズマ「お前いい奴だな・・・」

一刀「じゃあ遠慮なく集めさせてもらっよ。桃香、愛紗。手配を頼んでいいかな？」

劉備「まつかせーなさーい！」

関羽「御意。直ちに準備します」

二人は徴兵の準備に取り掛かった

公孫賛「はあ・・・、こうなったら私も出来る限りの協力はするよ・・・」

一刀「はは、ありがと。この恩はいつか必ず返すよ」

公孫賛「ああ、よろしく。・・・星、武具と兵糧の供出するよう、兵站部に手配してくれ」

趙雲「了解した。さ、北郷殿参ろうか」

張飛「鈴々も行くー！カズマお兄ちゃんも行くー！」

カズマ「分かったから引つ張んじゃねえ！！」

鈴々と、また引き摺られそうなカズマと一緒に兵站部へ向かった

その途中・・・

一刀「そういえば、さっきはありがとう」

俺は前を歩く星に話し掛けた

趙雲「別段。礼を言われるようなことはしておりませぬよ」



一刀「けど、白蓮を上手く乗せて・・・俺達に便宜を図ってくれたじゃないか」

趙雲「ふふ、なんのことやら・・・。それより北郷殿。討伐に際して、何か策のようなものはお有りか？」

悪戯っぽい笑みをした後、一転して真剣な表情で訪ねてきた

一刀「実は特に無かったりするんだよな・・・鈴々は何かある？」

張飛「鈴々は敵をやつつけるだけなのだ!!」

予想通りの答えだな・・・

一刀「カズマは？」

カズマ「カズマは敵をやつつけるだけなのだ」

張飛「ああゝ!!鈴々の真似するなゝ!!」

二人はそう言っただけでいた

一刀「まあ」、集まる義勇兵の数にもよるかな？敵の情報も不足してるし、それらを集めてから本格的に行動開始だな」

超雲「なるほど。しかしあまり悠長なことをしては、功名の場を失うのでは？」

一刀「最初の一步は慎重な方がいい。俺達が軍勢を率いても弱小勢力に過ぎない・・・功を焦って全滅したら元も子もないだろ？」

趙雲「ふむ。・・・なかなか良く考えた」

俺を信頼してくれてる人達のためにもここで失敗するわけにはいかない

一刀「ところでさ・・・趙雲」

趙雲「星でよろしい。私はあなたを気に入っておりますゆえ。それに・・・」

星は鈴々をからかっているカズマに目を向ける。その目は面白い物を見つけた様な目だった

俺達の初陣でのカズマの武勇伝は瞬く間に広がった。

天の拳を持つカズマが賊を一撃で倒したと・・・

それから星はカズマにも興味を持ったようだ。

カズマの拳、カズマはあれを『アルター』って言っていた

カズマのいた所ではその不思議な力をもった『アルター使い』が複数いたようだ

能力を発動させる時、周りの物を分解して『アルター』を出すようだが、本人にもそれ以上のことは詳しく知らないらしい

一刀「分かった・・・なら、星。星は白蓮の家臣になるつもりはなののか？客将ってことは、正式な家臣じゃないんだろ？」

趙雲「ええ。客将とはあくまで客分。好意によって力を貸しているにすぎませぬ」

一刀「じゃあ、いつか星もここを出るのか？」

趙雲「さて、・・・自分でも分らないのですよ。ここに留まるか、はたまた徳高き主を探すのか」

本人もまだこの世をどう渡ろうか決めかねているようだ

一刀「そつか。・・・なあ、星。もし、もしだよ？白蓮の所を出ることがあれば、俺達の所へ来てくれないか？」

趙雲「ふむ。・・・それもまた道かもしれないが。すまんが、自分の道は自分で選びたいのだよ」

一刀「そつか。・・・ごめんな。変なこと聞いて」

ふられたか・・・星は絶対桃香の力になってくれそうなんだけど

趙雲「いや。本音を言えば、誘って頂いて嬉しいですが。伯珪殿には恩がありますゆえ。まあ、それを返した後は北郷殿の道と私の道が交錯するやもしれませんな」

一刀「・・・俺はそう信じているよ」

趙雲「ふふ、私もそう信じておこつ。ところで・・・」

そう言つて星は俺達が歩いていた通路の外、中庭を指さした

するとそこには、鈴々をからかい過ぎたあげく

戦鬪になりそうなカズマと鈴々がいた

趙雲「あれは止めなくてよろしいので？」

俺は中庭へ走り出した

## 7話 『伏龍、鳳雛』

俺達が兵站の受領手続きを行なっている間、桃香達は街に出て義勇兵を募る

こうして、手分けして作業をしているうちに一週間が経過し・・・

準備が整った俺達は集まった義勇兵を率いて出陣の時を迎えていた  
見送ってくれた白蓮の顔は引きつっていた

まあ、自分の街だけじゃなく他の邑からも集まってくれて、結局六千人ほど取られちゃ無理もないか・・・

関羽「しかし、これからどうするか・・・」

張飛「こうきんとーを探し出して片っ端からやつつけるのだ」

一刀「でもそれだとすぐに兵糧がなくなるよ？」

カズマ「それは困る！」

劉備「うーん、どうすればいいのかなあ・・・」

なんて悩んでいると、

??「しゅ、しゅみません！あう噛んじやった・・・」

声のした方に振り向くとそこには、

??「こ、こんにちゅは!!」

??「ちわ、っですう・・・」

可愛らしい帽子と魔女の様な帽子をかぶった二人の少女がいた

カズマ「誰だ？」

??「わ、私は、しょ、諸葛孔明れしゅ！」

??「私は、んと、えつと、ほ、ほーとれしゅ！」

劉備「えつと・・・諸葛孔明ちゃんに、ほ、ほ・・・」

鳳統「鳳統れしゅ!あう・・・」

関羽「どうしてこんなところに？」

諸葛亮「え、えつと私達水鏡塾っていう私塾で学んでいたんですけど、大陸の危機的状况を見るに見かねて」

鳳統「私達の知識を活かして困っている人を助けようと思ったんですけど、自分達だけじゃ何も出来なくて、それで誰かに協力してもらおうと思って」

諸葛亮「そ、それで天の御使いが義勇兵を募集していると聞いて！」

鳳統「それで話を聞くと私達と同じ考えでいらっしやると分かって、それで協力してもらおうと・・・」

諸葛亮「だから、あの、私達を戦列の端にお加え下さい！」

鳳統「お願いします！」

そう言つて小さな体を更に小さくするようにペコリと頭を下げた

関羽「戦列に加えるには少々若すぎる気もしますが」

一刀「愛紗の言うことももっともだけど、剣を持つだけが戦いじゃないだろ？」

劉備「そうそう！強くなければ戦えないなんてことないよ」

カズマ「お前も全然戦えないしな」

そう言われて桃香は軽く落ち込んだ

名前を聞いて仰け反りそうになったが、二人は三国志を代表する名軍師だ

そんな二人が俺達に協力してくれるならこれから先にも希望が持てる

一刀「それに私塾で学んだのなら、今後大きな力になってくれるさ」

関羽「そうですか・・・なら、私はご主人様の判断にお任せします」

しかし、二人が仲間になるのが早くないか？

やっぱり単純に三国志の世界じゃないのか・・・

一刀「そういう訳で。二人とも、これからよろしく」

諸葛亮「は、はい！私は姓は諸葛、名は亮、字は公明で、真名は朱里です！」

鳳統「んと、姓は鳳、名は統、字は士元で、真名は雛里でしゅ！」

一刀「俺は北郷一刀。一応天の御使いつてことになってる」

俺達は自己紹介をして桃香達も真名の交換をした

一刀「で、早速ですが俺達のこれからについて二人に意見を聞きたい」

諸葛亮「え、えっと、新参者ながら意見させていただきます。私達の勢力は他の諸侯に比べると極小でしかないのです、これからは黄巾党の中でも小さな部隊を相手にして名を高めて行くのが最良かと」

愛紗は相手を選ぶことに渋っていたが、俺達は所詮自分の街も持っていない義勇兵の集まりだ

そんな俺達が名を高めて行くにはそれしかないのだろう・・・

そこで俺達は問題だった兵糧は名を上げつつ、付近の街や邑の豪族に寄付を募ったり、敵の補給物資を鹵獲していこうという方針になった

こうして俺達は新しい仲間を迎えて白蓮の元を出発した



果てしない荒野を進みながら黄巾党の動向を探るために細作を放つ  
仕事をしているように聞こえるが実際は朱里と雛里がやってくれて  
いるのでやることがない

一刀「暇だあゝ。これだけなにも起きないと拍子抜けだな」

カズマ「何だ、戦いがしてえのか？」

一刀「そう言う訳じゃないけど、こうなんにもないと・・・」

すると、前方から兵士が走り寄ってきて跪く

兵士「伝令！ここより前方五里のところに黄巾党とおぼしき集団が  
陣を構えています！その数、約一万！」

一刀「い、一万！？・・・多いな、こっちは約六千」

兵数を考えれば苦戦は必至だな

カズマ「望みが叶ったな、戦争ジャンキー」

一刀「俺はこんなの望んでないよう・・・」

報告を聞きながらどう戦うか頭の中でシュミレートしていると不意に袖を引かれた

そこには朱里とその背中に隠れた雛里がいて、

鳳統「だ、大丈夫です。きっと勝てます」

オドオドしながらも俺の目を見つめて大きく頷く

鳳統「私達には勇名を馳せる愛紗さんや鈴々ちゃんがいますし、兵隊さんの士気も高いですから」

一刀「でも、相手はこっちの二倍近くいるよ?」

鳳統「だけど、えっと・・・わ、私達がいいますから」

関羽「ん?どういう意味だ?」

鳳統「あう・・・」

愛紗の言葉にビクリと体を震わせた雛里がヨロヨロと俺の後ろに隠れた

張飛「愛紗、雛里を怖がらせちゃだめなのだ」

関羽「ええ!? 私は別に怖がらせてなど!」

怖がる雛里の頭を撫でて慰めていると場の空気を戻そうと朱里が進

み出る

諸葛亮「え、えっと、ともかくこんなときこそ私と雛里ちゃんが学んできたことが役に立つと思うんです！」

二人は私塾で多くの兵法書や民法書、経済書などを学んでいたようだ  
一刀「じゃあ実力を確かめる意味でも、数の差を覆す策について教えてくれるかい？」

その言葉に二人はニコリと笑い

鳳統「はい！敵は五里先に陣を構えているとのことですが、ここより五里先とは、兵法で言うク地となっています」

張飛「くちー、ってなんなのだ？」

鳳統「各方面に伸びた道が収束する場所のことです」

多分補給目的でそこに軍を配置したんだろうけど、そんなところに一万しか兵を置かないなんて・・・

朱里「これにより、相手が雑兵だと言うことが分かります。そしてそこが狙い目かと」

鳳統「そこは重要な拠点のはずです。ここを破れば私達の名は否応なしに高まるはずです。さらに、敵は数の少ない私達を見て油断していることでしょう」

関羽「なるほど・・・。油断している敵を策を持って破るというこ

とだな？」

鳳統「は、はひー！」

また俺の後ろに隠れる

一刀「よしよし。見た目と違って優しいよ愛紗は」

関羽「ほう・・・遠回しに見た目は怖いとおっしゃるのですね？」

カズマ「・・・・・・・・」

関羽「カズマ殿、何か言いたそうですが・・・」

カズマ「な、なんでもねえよ・・・」

珍しくカズマが焦ってる、おそろべし関雲長！

張飛「そんなことどうでもいいから早く戦うのだ！」

一刀「ごめんごめん。それで話の続きは？」

諸葛亮「数で負けているので、まずは敵を引つ張り出し、数で負けない状況を作ります」

鳳統「そこでここから北東に二里ほど行つたところに、川が干上がって出来た谷があるのでそこに誘き出します」

狭いところで数の利点を無くすわけか・・・ん？

一刀「なんでそこに谷があるってわかるんだ？地図にはそんなの書いてないぞ」

諸葛亮「ご主人様の持っている市販の地図には、道などしか書いてなくて山とか川なんかの細かいものは載っていないんです。幸い私達は水鏡先生のツテで正確な地図が見れたので、おおその地理は把握しています」

一刀「・・・大陸中の地形暗記してるの？」

鳳統「は、はい」

末恐ろしいな・・・

一刀「じゅあ、どうやって誘き出す？」

諸葛亮「敵陣の前に全軍で出て、後は逃げます」

関羽「釣りか・・・」

鳳統「はい。そうして谷まで追尾させます」

これで策は決まった俺はみんなに向かって支指示を出す

一刀「じゃあ愛紗は前線で敵を釣ったら反転して谷を目指して。鈴々は後衛、その補佐に朱里がついてくれ」

諸葛亮「はい！」

一刀「俺と桃香は本陣、その補佐には雛里だついて。後、カズマだ

けど・・・」

カズマ「わかってるよ！また待機だろ？」

一刀「ああ、護衛よろしく頼むよ」

劉備「じゃあ、方針も決まったことだし敵さんめがけて微速前進」  
」

気の抜ける桃香の掛け声と共に俺達は敵陣に向かって進軍し始めた

斥候「前方、敵陣地に動きあり！」

前方に放っておいた斥候が次々と報告してくる

一刀「わかった。愛紗！鈴々！」

関羽「御意！」

愛紗と鈴々は兵達に指示を飛ばした

斥候「敵陣開門！来ます！」

一刀「行くぞ、みんな！」

兵士「おおおおおおおおお！！！！！！」

勇ましい声と共に突撃し、両軍が激突した

激戦を繰り広げるが、やがて数で押され始めた愛紗の部隊

これを桃香の部隊を援軍に向かわせ、持ちこたえさせた

すると、敵の後方から増援が出て来た

鳳統「ご主人様！敵陣に動きがありました！恐らく状況を観察していた部隊出て来るかと」

一刀「ああ！伝令！張飛隊に関羽隊、劉備隊の後退を援護しつつ、打ち合わせ通り動いてと伝えて！」

兵士「御意！」

一刀「雖里、愛紗達に合流した後すぐに後退するよ。準備よろしくね」

鳳統「はい！」

しばらくすると桃香と愛紗の部隊に合流した

一刀「二人ともお帰り！無事で良かったよ」

俺は二人が無事なことに安堵する

関羽「ご心配ありがとうございます」

劉備「でもご主人様、これからが本番だよ」

一刀「そうだな・・よし！すぐに反転！愛紗は鈴々の後方で後退の補佐、桃香は本陣の指揮を！」

こうして俺達は敵を引き付けながら谷を目指した

一刀「愛紗達の様子は！？」

劉備「大丈夫、追い払わず、諦めさせずに付いてきてるよ！」

作戦は順調。俺達は目の前に迫った目的地を確認して先行している部隊に二手に別れて待機し、殿が通り過ぎたら反撃に移るように伝令を出した

一刀「よし！そろそろ俺達も反撃の準備をしよう」

そう桃香と雛里に伝えると二人は各部隊に指示を出しに行く



鳳統「では、反転してください!!」

目的の場所に付き、部隊を反転させて敵を待ち構える

指示を聞いた兵達はやっと反撃できることに高揚感に身を震わせて、決戦の時を待った

しかしここである疑問が浮かんだ

一刀「(カズマが静か過ぎる・・・)」

そう、戦いが始まってからカズマは一言も喋っていなかった

緊張? いやいやそれはない・・・しかし俺達が峡間へ向かう途中もただ黙って付いてきていた

不気味過ぎる・・・

そんなことを考えながら愛紗達の部隊を待っていると

劉備「ご主人様! 愛紗ちゃん達が来たよ!」

関羽「ご主人様!」

張飛「お兄ちゃん!」

諸葛亮「お待たせしました!」

一刀「よし、みんな反撃だ!」

張飛「待ってました！お兄ちゃん全力でやっていいよね！？」

武器を振り回しながら鈴々が訪ねてきた

一刀「ああ、行ってこい」

その告げると鈴々は部隊を連れて全速力で待ち伏せで混乱している敵に突っ込んで行った

それを愛紗がやれやれといった感じで追いかける

策にはまった敵は二人に成すすべもなく、次々に倒されていった

そして・・・

諸葛亮「今です！敵は浮き足だっています！ご主人様総攻撃を！」

一刀「よし！みんな疲れてると思うけどあと一押しだ！」

関羽「勇敢なる義勇兵の諸君！その力今こそ見せる時！」

張飛「突撃、粉碎、勝利なのだ~~~~~！！！」

兵士「うおおおおおおお！！！！」

士気は最高だ！後は敵を倒すのみ！！

一刀「全軍突撃！！」

カズマ「その言葉、待ってたぜ！！！！」

振り向くと今まで静かだったカズマが走り出した

我慢してたんだな・・・

鳳統「あ、あのご主人様。大丈夫なんですか？カズマさん、武器も持たないで・・・」

一刀「ん？ああ、大丈夫だよ」

敵に向かって走って行くカズマを心配する雛里

諸葛亮「で、でもう・・・」

一刀「まあ、見てればわかるよ」

そう言ってまだ不安そうな二人にカズマのいる方を指さすと、カズマが走りながら腕をアルター化させていた

それに驚く二人は目を大きく開いてそれを見ていた

カズマ「最近溜まってたもん全部出すぞ！！衝撃の！！」

カズマは拳を地面に叩き付けて上へ飛んだ

カズマ「フアーーーーーー ストブリットオオオオオオオオ！！！！！！」

よほど溜まっていたのが伝わるほど、この前より凄い雄叫びを上げてカズマは敵を吹き飛ばした

諸葛亮「……………」

鳳統「……………」

うん、初めて見たらそうなるよね・・・

カズマの一撃により敵はさらに混乱し、愛紗や鈴々達に倒されていた

賊「くそ！なんなんだてめえ！！！」

等々、残り僅かになった賊は皆、カズマに怯えていた

カズマ「弱い者イジメは趣味じゃねえが、お前らもやってたんだろ？なら、文句は聞かねえ」

カズマは拳を強く握り締めた

カズマ「自分達のやったこと後悔しな！！」

背中の二枚目の羽が碎けて賊に接近していく

カズマ「撃滅のセカンドブリットオオオオオ！！！」

カズマが残る賊を吹き飛ばしたのを見て俺達は勝鬨を上げた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5471w/>

---

恋姫×スクライド

2011年11月21日16時16分発行